

インドの「いちば」フィールドワーク覚書

筒井由起乃

1. はじめに

「一度行くと虜になるか、もう二度と行きたくないと思うか…。」

インドとはそういう国だと聞いて興味を持ち、ガイドブックを手に入れてからおよそ20年後、本当にインドに行けることになった。人生とはわからないものだ。

このたび本学の特色ある研究奨励費「インドにおけるいちば（市場）と女性—インターディシプリンからの試み—」（代表：小松久恵）の助成うけて、インドの「いちば」を調査する機会を得た。私の専門はベトナムで、インドは門外漢であるが、「いちば」には大いに関心をもっている。「いちば」は街の胃袋といわれる。「いちば」へ行けばその土地のことがわかる。だから、仕事でもプライベートでも見知らぬ土地を訪れると、つい「いちば」に足が向かってしまう¹⁾。

インドは右肩上がりの国と聞く。経済も人口も都市も成長する、そんな活気ある国の「いちば」はどのような場所なのだろうか。どのようなモノがどのように売り買いされ、そこにどんな人間模様（社会の仕組み）が見えるのだろうか。

このような関心と期待をもって、冬休みに入った12月下旬、インドへ向かった。この小稿では、その一次報告を行いたい（調査期間は2015年12月24日から12月29日）²⁾。

2. デリーという都市の空間構造

インドの「いちば」を調査するにあたり、まず対象地としたデリーとはどのような場所なのかをみてみたい。インドの都市は「混沌」というイメージでとらえられることが多いが、実際に歴史的痕跡と急速に変化している近代的景観が入り混じっている。「インド的景観」・「多重的都市景観」ともいえる。すなわち、目覚ましい経済成長を遂げつつある上層階層や中間層の生活の場と伝統的な生活様式を送る人々の生活の場があり、それぞれが排他的に存在する場と交差する場があるのである³⁾。

このようなデリーの都市空間は以下の5つに大別できる。

①オールドデリー（シャー・ジャハーン・バード，セントラル，旧市街）

イスラーム王朝のムガル帝国時代、1638年にアウラナーから遷都、宮殿であるラールキラーの西側を取り囲むように形成した囲郭都市（ウォールシティ）で、迷路状の密集した街区（図1）。

②ニューデリー（植民都市）

植民地時代後期、カルカッタ（現在のコルカタ）から「帝都」が移され、1911年から1933年にかけて開発された地区で、ロータリー状の道路パターンをしたコンノート・プレイスが中心。かつてはイギリス植民地支配の象徴であったが、現在は土産物屋やブランド衣料品店などの商業施設のほか、映画館やホテル、オフィスなどが集積する（図2）。



図1 オールドデリー

人口密度が高い中心部には、イスラーム寺院のジャマ・マスジッドが建てられ、イスラーム教徒の集住地区もみられる。



図2 コンノートプレイス

ロータリー状の道路パターンをしたコンノート・プレイス。かつてはイギリス植民地支配の象徴であった。

③アーバン・ビレッジ

元農村が都市化したところで、旧住民と新住民の混住地である。旧住民は脱農し、アパート経営や雑貨屋、賃労働などに従事している。

④スラム

2001年センサスによると、デリーのスラム人口は190万人で、ムンバイ大都市圏についで多い。デリーのスラムは住宅地区に55.9%、路肩に39.6%が分布し、公園やオープンスペースには1.6%と少ない⁴⁾。

⑤郊外のニュータウン

1996年にマスタープランが策定され、デリー周辺のグルガオン、ノイダ、ファリーダーバードなどの6都市をDMA (Delhi Metropolitan Area) タウンとし(所属する州が異なる)、衛星都市であるリングダウンとして職住近接型の都市を建設し、デリーの機能分散が図られた⁵⁾。



図3 スラム

路肩にあるスラム

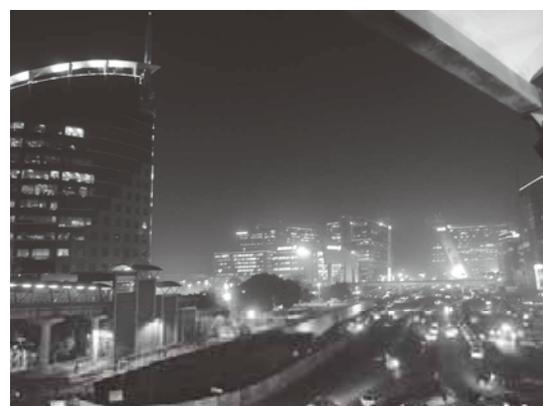


図4 郊外のニュータウン

グルガオンの夜景

このように多重的な都市空間であることを念頭に、複数のエリアの「いちば」を訪れることとした⁶⁾。

3. デリーの「いちば」

現代インドの流通においては、①零細経営の個人経営の商店が主であり、②特定の商品に特化した小売商店、③生鮮食料品を中心とした在来市場と、ローカルなスケールが幅をきかせている。大規模なショッピングモールは2000年代に入ってから増えているが、まだマイナーな存在といえる。インドのショッピングモールでは、シネマコンプレックスやフードコートもあり、商品購入以外のサービスも供給されているが、一部の巨大モールを除いて日本や欧米のように百貨店やスーパーなどの大型核店舗はない。モールの専門店はいンド人がグローバルに展開する国内外のブランドに出会う場にもなっており、従来の「いちば」とは異なる場として捉える必要があるかもしれない⁷⁾

本調査で調査対象とした「いちば」は、デリーの多重的な都市の特徴を考慮し、オールドデリー、ニューデリー、新市街（郊外のニュータウンを含む）に分け、それぞれのエリアから選択された（図5）。

これらの「いちば」の空間構造を比較検討するというのが、今回のフィールドワークの一つ目の目的であった。ところが実際に行ってみて、そもそも「いちば」の概念自体が、私のイメージするものとインドのそれとがかけ離れていることに気づかされた。まさに、カルチャーショックである。私のイメージするのは、「いちば」というハコモノがあり、その内部に商店が集積するというものである。だから内部の空間構造という発想になるわけだが、デリーの「いちば」は、「マーケット」と呼ばれているところでも⁸⁾、商店街



図5 デリーにおける調査地

Google map をもとに作成

のような景観をなしている（図6，図7，図8）。当初の目論見は見事に外れたが、これはこれでわめて興味深い事実である。

たとえば、デリーのでも高級なショッピングエリアとして知られるカーンマーケットをはじめ、デリーの「いちば」は広場や駐車場を囲むパターンが多くみられるが（図9）、これはイギリスの都市プランによってつくられた街区に、商店が徐々に集まりショッピングエリアに変容したためではないかとも考えられる。インドの「いちば」を理解するためには、「いちば」がいつできたのかというよりもむしろ、どのようにして出来上がってきたのかというプロセスに目を向ける必要があるのかもしれない。

フィールドワークの二つ目の目的は、インドの人にとって「いちば」とはどのような場所なのかを探ることであった。デリーの「いちば」を訪れて感じたのは、従来の「いちば」は生活の場の延長ではあるが、モノを売り買いする整然とした場であり、売り手と買い手の目的や役割（扱う商品）が、ベトナムなどと比べて明確であることである。それと関連



図6 INA マーケット

一つの建物の中に商店が入るといふ「いちば」は例外的。靴屋、金物屋などあるが、客足は隣接する生鮮品エリアへと向かう。



図7 INA マーケットの生鮮品エリア

上部に簡単な覆いがみられるように、複数の商店が軒を連ねる商店街である。野菜、魚、肉、香辛料など商品の種類ごとにエリアが分かれる。



図8 サウスエクステンションマーケット

生鮮品や雑貨、公共サービスなどが入るローカルなマーケット。1階が店舗、2階が住居というアパート形式である。



図9 GK-1N ブロック

左側に写っている広場を囲んでコの字形にブティックなどおしゃれな店がならぶ。



図10 バブーマーケット

安価な服飾品を扱う店が集積している。



図11 コンノートプレイスの“場外”

高級店が入るショッピングモールの外の回廊には安価な雑貨などを扱う露店がならぶ。

があるのかどうかかわからないが、“場外”の露店や行商人が少ないということも印象的であった。

対照的にショッピングモールは、レジャー的な要素を含むいわば生活と切り離された空間であるが、逆に、国内外の高級ブランドから日用雑貨までさまざまな種類の商品が集まるマルチな空間にもなっているともいえ、興味深い。

4. おわりに

活気あふれる国インドの「いちば」はどのような場所なのだろうか。どのようなモノがどのように売り買いされ、そこにどんな人間模様（社会の仕組み）が見えるのだろうか。という関心のもとにインドへ足を踏み入れた。言葉も「常識」も異なるなかで、門外漢が短期間のフィールドワークで取り組むには大きすぎるテーマである。十分にできなかった部分もあるが、それでも得たものは大きかった。その一部をここで述べた。今後資料の分析をじっくり行い、まとめていきたい。「一度行くと虜になるか、もう二度と行きたくないと思うか…。」どうやら前者となったようである。

付記：本報告は、2015年度追手門学院大学特色ある研究奨励費「インドにおけるいちば（市場）と女性—インターディシプリンからの試み—」（代表：小松久恵）による成果の一部である。

注：

- 1) 拙稿「「いちば」からみたシンガポールの農業」アジア学科年報1, 94-96頁, 2007年, および「ハノイ市における市場の特徴」(『アジアの市場(いちば)の現状と背景—ヒトとモノの出会いと交流—』(2004年度追手門学院大学共同研究成果報告書)), 47-51頁, 2005年を参照。
- 2) これに先立ち, 2016年1月12日に「フィールドワーク論」という授業の中で, フィールドワークの多様性を伝えるためという趣旨で, 4名がそれぞれのフィールドワークについて報告した。ここでの記述は, この報告に基づいている。
- 3) 友澤和夫『世界地誌シリーズ5 インド』朝倉書店, 2013年, p.116, を参照。
- 4) 前掲3), p.119-121, を参照。
- 5) 前掲3), p.121-122, を参照。
- 6) 調査地の選定は, 各人の調査目的を考慮しつつ, インド研究者である代表の小松氏が行った。
- 7) 前掲3), p.127-128, を参照。
- 8) たとえばインド日本人会のサイトでは, マーケット情報として45カ所が紹介されている。
<http://delhinhonjinkai.in/> (閲覧日2016年1月5日)を参照。